

JICA's world

MARCH 2013 No.54

3

特集 JICAボランティア

世界に羽ばたけ！ 草の根の外交官

ごみ山で生きる人々

from Philippines フィリピン

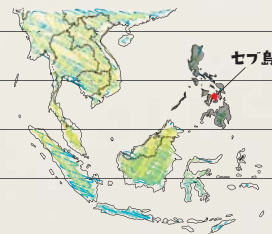


車から降りてすぐに鼻を刺す悪臭。そして間髪入れずに襲ってくる吐き気。フィリピン中部のセブ島。市街地近郊のごみ捨て場を訪れた私は、目の前に広がる光景にがくぜんとした。見渡す限りごみ、ごみ、ごみ…。そのすぐ隣には、今にも崩れてしまいそうな家が建てられ、ごみをせっせと捨てる住人たちがいた。

ごみを踏み分け、靴を真っ黒にしながら進んでいく。顔に止まる無数のハエが気にならなくなってきたころ、ふと横を見ると、1人の少年がしゃがんでごみをあさっていた。おもちゃでも探しているのか、もしくは、家族のためにお金に換えられる物を探しているのか…。少年はそんな私の疑問にも答えず、自分で敷いたマットの上で、ただごみを手に取り、じっと見つめていた。

将来このごみ山で生まれる子どもたちは皆、まさに今の彼のように、ごみを見つめる生活を送るのだろうか。

撮影：村上 奨



セブ島

あなたの作品募集中！

「my photo」では、あなたが撮影した写真を募集しています。貧困や環境問題などをテーマにした写真、国内外問わず国際協力の最前線で活動に励む日本人や途上国の人の姿、テレビや新聞ではなかなか報じられない土地の風景や人々の暮らしなど、国際協力や開発途上国を身近に感じられる写真を、撮影時のエピソードを添えてご応募ください。応募作品の中から毎号1枚、本コーナーで紹介させていただきます。

応募条件 ①応募者本人が撮影した作品に限ります。②被写体に関する肖像権は、応募者の責任において了解が得られているものとします。③写真は、解像度が300万画素以上(目安)で撮影されていること、また画像の記録形式はJPEGを推奨します。

応募方法 お名前、連絡先(電話番号とEメール)、エピソード(300~350字)、記名の可否をご記入の上、写真とともに応募先アドレスまでEメールでお送りください。

*応募作品は本コーナーのほかに、事前確認の上でJICAの広報活動に活用させていただく場合があります。ご記入いただいた個人情報はこちら以外の目的では使用いたしません。また、応募作品はご返却いたしませんので、あらかじめご了承ください。

応募 / 問い合わせ先

jica-photo@idj.co.jp

(JICA's World 編集部宛)

Contents

02 my photo ごみ山で生きる人々 フィリピン

04 特集 JICAボランティア

世界に羽ばたけ! 草の根の外交官

巻頭対談 JICAボランティアのリアル ルー大柴さん × 鮫島弘子さん
人々と共に生きる ルワンダ
暮らしを変えるものづくり グアテマラ
東洋医学の力で未来を切り開く ニカラグア
JICAボランティアのアイデア箱
その汗と涙が“今”の力に



20 PLAYERS 経験がビジネスに“生きる” テラインターナショナル株式会社

22 地域と世界のきずな かんがい技術で農家の人々を笑顔に 宮城県

24 JICA STAFF 廣澤 仁 JICA青年海外協力隊事務局 アジア・大洋州課

25 JICA UPDATE

26 特別レポート 真戸原直人さん
アフリカの大地を
踏みしめて

in マラウイ



28 ココシリ 「ここが知りたい」 いろんなトピックを分かりやすく解説!

30 地球ギャラリー
コンゴ民主共和国
国を支える一本道



37 イチオシ! 本・映画・イベント

39 MONO語り パッチワークで生活にアラブの彩りを

40 私のなんとかしなげや! 高柳 恭子 フリーアナウンサー



JICAのビジョン

すべての人々が恩恵を受ける、
ダイナミックな開発を進めます

Inclusive and Dynamic Development

表紙

撮影：久野武志

ルワンダでストリートチルドレンの心の
ケアに取り組む青年海外協力隊員の
鈴木かおりさん。子どもたちが笑顔
を取り戻せるよう活動に汗を流す



日本から飛び出し 大きな世界を見る

ルー大柴さん(以下■) 実は若いころ、青年海外協力隊にあとがれていました。高校卒業後にヨーロッパを放浪したんですが、日本に帰ってきたら、何をやってもうまくいかなかった。そんな時、協力隊のポスターを見つけて「知らない土地で新しいことに挑戦するのも悪くないな」と本気で考えた時期がありました。

鮫島弘子さん(以下●) 私は夢だったプロダクトデザイナーになれたはずなのに、ものすごいスピードで生産・消費されていくモノを見て「これでいいのか」と。もつと社会のためになるモノづくりってないのかなと考えてたどり着いたのが青年海外協力隊。あ、これだと。私の疑問を解決するヒントが、そこにあるような気がしたんです。

■ 昨年、エチオピアの小学校で体育を教えている協力隊員に会ったの

ですが、20代半ばなのにすっかり生きてびっくりしました。「モノがないので、ボール一つでできるサッカーがいい。体を動かしながら、チームワークの大切さも学んでほしい」と話していました。そんな彼の思いを受けてか、子どもたちの生き生きとした表情が印象的でした。

● 私の派遣国もエチオピアだったんですよ。「いいモノを作りたい」と勇んで行ったのですが、最初はすごく苦労しました。小さいころに父親の仕事で開発途上国に住んだことはあったのですが、エチオピアはそれまで行った国の中で一番貧しかった。そんな国でデザイナーとして私ができることは何だろうと、最初の数カ月はもんとしていました。

■ 協力隊の皆さんは、そこから立ち上がる力がすごいよね。世界一暑いと言われるジブチに行った時は、「エアコンもないし、洗濯もすべて足踏みなんですよ」なんて、協力隊員の方が笑いながら話してくれた。みんな本当にたくましいし、「この国に少しでも

何か残せれば」と真つづくなんです。● 現地の人の変化を感じた時、それまでの大変さはすべて吹っ飛んでしまします。エチオピア人の職人たちがファッションショーを企画したのですが、深夜まで一緒に頑張って働いてくれた人もいた。「エチオピアにいれば、新しい技術やデザインに触れる機会が少ない。だからヒロコのプロジェクにかかわれて、それだけで幸せだし楽しい」と言ってもらえてうれしかったですね。彼女は革職人で、今のビジネスのパートナーです。

ゼロから生み出す 力をはぐくむ

■ 同じ年代の子どもの持つ父親として、協力隊員の若者たちを見ると、彼らの方がはるかに大人だと感じます。異国の地に放り込まれて、自分自身について、そして世界のことについて、真剣に考えている姿には胸を打たれます。

● 私は自分で考えて動く力

巻頭対談

ルー大柴さん × 鮫島弘子さん

JICA ボランティアのリアル

開発途上国の人々の助けになりたい。

そんな志を胸に、世界各地で奮闘を続けるJICAボランティア。彼らは現地を見て、感じながら活動しているのだろうか。ルー大柴さんと青年海外協力隊OGの鮫島弘子さんにその生の姿を語ってもらった。

■ 自分が置かれた環境の中で何ができるか、無から有を生み出すのが協力隊。ジブチで理科を教えている隊員は、廃材の段ボールに穴を空けて実験道具を作っていた。みんなに分かりやすく教えたいという思いが伝わってきて、子どもたちも心から楽しんで授業を聞いていました。トライ&エラーを繰り返して培われた「力」は、これからの日本を支えていく上でも頼もしいですね。

● もう一つ大切なのはコミュニケーション能力です。協力隊は草の根レベルで活動するので、現地語の習得は不可欠。マイナーな言語も多くて苦労することも多いのですが、ジェスチャーを交えながら、一生懸命に伝えようとすれば相手も聞いてくれる。そうして相手との距離が縮まるんですね。

■ 僕が海外を放浪している時もそうでした。最初は英語もあまりできず、

何でもイエスと答えていたけど、それじゃダメだと。完璧でなくてもいいから、まずは伝えようとしないと分かってもらえないと気付いた。言葉と体で表現しようとする能力と姿勢は、帰国後も大きな武器になると思います。

苦しみの先にある 成長と喜び

● 協力隊から帰ってきて、自分のできることは何か、ずっと考えています。そして2012年2月に「Made in Ethiopia」という革製品を扱うブランドを立ち上げました。ほとんど知られていませんが、エチオピアの羊の皮は実は世界最高峰の質。協力隊の時に培ったネットワークを生かしながら、現地に工場を建設して製造までを行っています。

■ このバッグは本当に触り心地がいね！日本で見ることがないし、オリジナリティーがある。現地の雇用にもつながっていて、エチオピアの事情に詳しい鮫島さんだからこそできるオンラインワンのビジネスですね。
● 「アフリカの人を助けるために買

ってあげよう」という考えでは、長期的なビジネスにはつながらりません。私のこだわりは、買う人に長く使ってもらえる「ホンモノ」を、現地の人たちと協力しながら作る。大変なことも多いですが、やっと一生かけてやりたいことを見付けました。

■ 帰国しても途上国とつながって、お互いにとって、さらに良い関係が生まれるのは素晴らしい。「井の中の蛙大海を知らず」。日本の若い人たちにも、鮫島さんのように、失敗を恐れずにどんな外に出て行ってほしい。日本で悩みながら暮らしているのなら、途上国に行つて、思いっきり恥をかいて涙した方が成長できるんじゃないかな。

● ルーさんは生まれ変わって協力隊に参加するとしたら、どの国でどんなことをしたいですか？
■ 僕は人生のいかなる時も「縁」を大切にしたいから、どの国でも、どんなことにも挑戦してみたい。そんな予期しない運命を楽しんでいきたいですね。



エチオピアでの協力隊員時代、「Made in Ethiopia」をテーマにしたファッションショー

鮫島弘子 株式会社 andu amet 代表取締役 / 青年海外協力隊 OG

東京都出身。国内メーカーのデザイナーを経て、青年海外協力隊(デザイン)としてエチオピアとガーナで活動。2012年2月に株式会社 andu amet を立ち上げ、エチオピアの皮革を使ったファッション製品を製造・販売。日経WOMAN「ウーマン・オブ・ザ・イヤー2013」キャリアクリエイト部門受賞。



エチオピアの体育隊員と出会う「日本の若者はたくましい！」

鮫島さんがプロデュースしたエチオピア産のバッグを手にするルーさん



ルー大柴 タレント

東京都出身。1977年に俳優としてデビュー。2007年にNHKみんなのうたでエゴソング「MOTTAINAI」を発表。財団法人日本ユニセフ協会の世界手洗い大使、ODA広報番組「地球VOCE」の海外レポーターを務めるなど、社会貢献活動にも積極的に取り組む。

JICA ボランティアのSTEP

<STEP1>



JICAボランティアに興味を持ったら、全国の都道府県で開催される「体験談&説明会」へ。どんな活動をするのか、応募するために準備すべきことは?そんな疑問にJICA職員やJICAボランティア経験者が答えます。「体験談&説明会」に関する情報は

JICAボランティア 説明会 で 検索

<STEP2>

応募書類を郵便ポストに投函。「体験談&説明会」、JICAボランティアのウェブサイト(www.jica.go.jp/volunteer/)、JICAの国内機関などで応募書類は入手可能。一次書類選考、二次選考での面接を経て合格者を決定。

<STEP3>



合格通知を受け取ったら、派遣に向けて準備スタート。専門分野の実践的な技術を磨くために「技術補完研修」が行われる職種も。その後、JICA二本松訓練所(福島県)、JICA駒ヶ根訓練所(長野県)での「派遣前訓練」を通じて、約2カ月間みっちりと言学と途上国生活のノウハウを学ぶ。

訓練生の声



あらた
大竹 更さん

JICA二本松訓練所で派遣前訓練に参加

2013年4月の出発に向けて、派遣国モロッコの公用語であるフランス語を約210時間かけてみっちり学びました。私の担任はモロッコ出身の先生で、現地で使える「会話力」を重視した実践的な授業が役立ちました。その他にも、JICA職員や専門家の方々から、国際協力や異文化理解、安全対策などについて、派遣前に知っておくべき基礎知識を学ぶ講座など、盛りだくさんのカリキュラムでした。また、PCの使い方や途上国でも簡単にできる日本食の作り方など、訓練生一人一人が持つ技術やノウハウが共有できるのも魅力です。

協力隊に参加したいと思いつけて3年。その夢がかない、今はずっと楽しみです。現地の人に「日本から協力隊員が来てくれてよかった」と言ってもらえるよう、力を出し切ってがんばりたいと思います。

語学講師の声



シリパーラ・ウイラコーンさん

JICA駒ヶ根訓練所
スリランカ/シンハラ語担当

JICA駒ヶ根訓練所で語学講師を務めて約15年になります。シンハラ語を学ぶのはほとんどの人が初めて。基礎を正しく理解しないと応用力が育たないため、まずは読み書き、その後さまざまな場面を想定した会話を徹底的に教え込みます。

私のキャッチフレーズは「カマックネー」。シンハラ語で「構わない」という意味。間違いをしても「構わない」から、どんどん発言することが大切だと言っています。また、早く現地になじめるよう、授業の合間に、スリランカの文化などについても話すようにしています。

JICAボランティアの皆さんは、自ら学ぶ意志を持ち、縁もゆかりもない国へと飛び込んでいきます。彼らが現地の人々と仲良くなり、国と国の懸け橋となって、世界を支えていってくれることを願っています。

<STEP4>

いざ、派遣国へ! 現地でオリエンテーションや語学訓練を受けた後に配属先へ。困ったことがあれば、いつでもJICA事務所のスタッフが相談に乗ってくれる。

<STEP5>

帰国後は、日本での「帰国後研修」を経て新たなフィールドへ。プロのコウンセラーによる進路相談サポート、JICAボランティア経験者のための進路情報も充実。

特集 JICAボランティア

世界に羽ばたけ! 草の根の外交官

< 訓練所のある1日 >

- 5:40 起床
- 6:30 朝の集い、体力づくり
- 7:10 朝食
- 8:45 ~ 11:35 語学研修
- 11:40 昼食
- 13:00 ~ 14:50 語学研修
- 15:10 ~ 17:00 国際協力や異文化理解などの講義
- 18:00 夕食
- 19:00 ~ 自主学習
- 23:00 消灯

コトハジメ



第一次隊として選ばれた精鋭たち

「日本青年海外協力隊」の誕生は1965年4月。草の根レベルの国際協力の推進、日本の若者の人材育成をうたったこの制度は反響を呼び、約700人の応募が殺到。同年12月にラオスへ、翌月にカンボジア、マレーシア、フィリピンへ、総勢26人が旅立った。

途上国で汗を流したJICAボランティアは、

48年間で88カ国 約4万4,000人!

あなたに合うのは?

青年海外協力隊



© Shiniichi Kuno

受入国 約80カ国(アジア、アフリカ、中南米、大洋州、中東)

協力分野 計画行政、公共・公益事業、農林水産、鉱工業、エネルギー、商業・観光、人的資源、保健・医療、社会福祉の9分野

職種 小学校教育、コミュニティ開発、看護師、スポーツ、環境教育など120種類以上

期間 原則2年

対象年齢 20~39歳

シニア海外ボランティア



© Natsuki Yasuda/studio AFTERMODE

受入国 約50カ国(アジア、アフリカ、中南米、大洋州、中東)

協力分野 計画行政、公共・公益事業、農林水産、鉱工業、エネルギー、商業・観光、人的資源、保健・医療、社会福祉の9分野

職種 行政サービス、品質管理、電気通信、マーケティングなど100種類以上

期間 原則2年

対象年齢 40~69歳

日系社会青年ボランティア

日系社会シニア・ボランティア



© Kenshiro Imamura

受入国 約9カ国(中南米)

協力分野 人的資源、保健・医療、農林水産、社会福祉など

職種 日本語教育、青少年活動、ソーシャルワーカー、小学校教育など

期間 原則2年

対象年齢 ●日系社会青年ボランティア 20~39歳
●日系社会シニア・ボランティア 40~69歳

2年間は長いという人に

短期ボランティア

日本を長く離れるのは難しいという方にぴったり。先方政府の要請に応じて、期間は1カ月から10カ月(最長1年未満)。

社会人にも参加のチャンス

現職参加制度

休暇などの扱いで、所属先に身分を残したまま参加できる制度。これまでのべ1,500以上の企業・団体から参加。

これを見れば分かる! 情報BOX

JICAボランティアのウェブサイト(www.jica.go.jp/volunteer/)には、募集要項や職種、JICAの担当者や経験者の声などのお役立ち情報が満載。経験者の「キャリア」や「思い」が一目で分かる「100人の履歴書」、現地での活躍を映像で紹介する「YouTube JICAボランティア公式チャンネル」にも注目。



© Takeshi Kuno



ハチの巣をアルミの容器に入れて、専用の機械で上から押しはちみつを絞る。コツがあるがジョセフさん(左)の手にかかれればお手のもの

「千の丘の国」の背後にある歴史
アフリカに「千の丘の国」と呼ばれる国がある。2月初旬、真冬の日本から逃げ出すかのように向かった先は、中部アフリカの内陸国ルワンダ。空港から首都キガリの市街地への道すがら、車窓に映るのは、丘、丘、丘……。その上に広がる空は、あまりにも青く、美しい。

そのすべてが、誰もが抱くであろうイメージと違っていた。そう、あの悲しい歴史を知っている人ならば。1994年、ツチ族とフツ族の対立から火が付いたジェノサイド(大量虐殺)。約3カ月で罪なく奪われた命は、100万を超えるとも言われる。しかし、そんな血にまみれた歴史からは想像できないほど、さわやかな風がほおをなでる。雨期と乾期のはさま、日中は日差しが強いが、朝晩は半そででは肌寒い。首都を後にし、ひたすら北東に

「おはようございます! 今日はいよいよお願ひします!」
朝9時、首都から約3時間、カラングジに着くと、青年海外協力隊員の吉田晃輔さんがすがすがしい笑顔で迎えてくれた。この地で暮らし始めてもうすぐ2年。村落開発普及員である彼の任務は、はちみつ作りを通じた生計向上だ。
「養蜂農家を回ってみると、それまでは自分たちの消費分だけを作っていました。でも、地域の産業としてのポテンシャルは十分にあると感じたんです」。吉田さんは農業省などに掛け合い、協同組合を設立することに。農家の人々を巻き込み、みんなではちみつ作りに取り組みることになった。
日本では、大手自動車メーカーの営業をしていた吉田さん。東京のオフィスで、夜遅くまで働く毎日。そんな彼が、休職してまで参加したかったのが協力隊だった。「BOPビジネス」に興味があ

あつて、いずれ開発途上国での業務に挑戦してみたかったんです。そのために、まずは現地を知らなければと。入社2年目、意を決して上司に相談すると、「がんばってこい!」と背中を押された。
草むらに入っていくと、10人くらいだろうか、村人たちが集まっていた。この日はみんなでハチの巣箱作り。竹を編んでかごを作り、牛ふんを塗って固めていく。「うないなもの尽くし」ですが、工夫すればどうにかなるものです」と吉田さんは笑う。
採れたてのハチの巣をギューッと絞ると、透き通った茶色の液体がとろりと出てきた。味見させ

1個2,000ルワンダ・フラン(約300円)、純度100%のアカゲラハニー。パッケージはデザインが得意な協力隊員が担当



※1年間3,000ドル以下で暮らす貧困層(Base of the Pyramid: BOP)を対象に、開発課題(所得向上・教育水準の向上・安全な水の普及など)の解決に向けたビジネス。



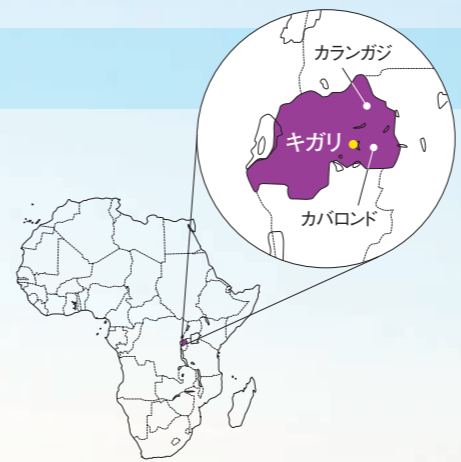
協同組合のメンバーがハチの巣箱の状態を交替で確認。みんなでのづくりに取り組む喜びがはぐくまれている

住民たちと養蜂用の巣箱作り。吉田さんの人柄と熱意が、村の人々を笑顔にしている



写真=久野武志(カメラマン)

ルワンダ
from **RWANDA**
青年海外協力隊



人々と共に生きる

中部アフリカの内陸国ルワンダ。1994年、この地を襲ったジェノサイドの悲劇は人々の心に深い傷を残した。その歴史を乗り越え、懸命に生きる人たちを支える青年海外協力隊。現地を根を下ろして活動する日本の若者たち取材した。

各地に低い丘が連なり、「アフリカのスイス」と呼ばれることも



[上]子どもたちにもヒアリング。住民の生活に入り込むことで、彼らの本当のニーズが分かる
[右]水源の水は病院に戻って水質を検査し、コミュニティの衛生対策に生かす
[左]水くみは共同作業。水のある場所には人が集まる

「あれ、おかしいぞ!」
井戸を掃除していた一人からそんな声が上がった。どうやら、このハンドポンプも調子が悪いようだが、修理するにも部品が足りない。すると、櫻井さんは誰かに電話をかけ始めた。相手は、別の地域で活動する協力隊員。余っている部品を貸してもらえらることになった。ルワンダ国内の、水の防衛隊は8人。「月1回は集まって情報共有をしています」と櫻井さん。困った時は助け合い、悩んだ時は励まし合う。数人で学校を巡回し、手洗いなどの衛生指導もしている。

※2008年の「第4回アフリカ開発会議(TICAD IV)」で日本が表明したアフリカの水分野の支援方針。村落給水、水道管理などの専門家やボランティアの派遣を通じて、水問題の解決を目指す。



川の泥水を生活用水として使うことも。感染症の影響が心配だ

スセンターの職員に質問を投げ掛けている。彼女も、水の防衛隊の一人。地域の病院や村を回り、水へのアクセス、衛生管理の状況について調べている。不衛生な水を原因とする病気をゼロにすること。それが彼女の目標だ。

「以前勤めていた会社に協力隊経験者がいて、実はずっとあこがれていたんです」。退職して大学に入り直し、保健師の資格を取得した。その熱意はどこからくるのか。すべては、途上国の人の役に立ちたいという思いからだという。そして今、彼女はその夢を実現し、ルワンダの農村で汗を流しているのだ。

「家は毎日2回は必ずここに来るよ」
真つすぐな瞳で答える子どもたち、黒川さんの顔が曇る。「学校にも行けず、不衛生な水が原因で病気になる子もいる。その状況を少しでも改善したいんです」。水源の水はペットボトルに詰めて持ち帰り、活動拠点の病院で成分を検査する。地道な取り組みだが、この町の人々の生活が少しでも良くなればと、黒川さんは精一杯思いを込める。

「先月、下痢症の患者さんほどたくさんいましたか?」
「衛生教育はどのように実施していますか?」
昼下がり、黒川美央隊員がヘル



小学校でハンドポンプの修理方法を指導する櫻井さん。子どもが体重をかけてポンプを押すと、負荷がかかって壊れやすくなってしまふ

命の水を守るため
水の防衛隊が活動中

行きは美しい風景ばかりに目を奪われていたが、車で南下して行くくと、所々、道路脇にあるハンドポンプ付きの井戸が目につく。数人の子どもたちが集まっていたので、南東部の町カバロンド辺りで車を止めた。

「何をやっているの?」。そう尋ねると、「家のお手伝いで水をくみに来たの」と女の子が答えてくれた。小さな手が抱えている黄色のタンクは、ずっしりと重い。農村部ではまだまだ多くの人が井戸水に依存した生活。5キロ以上の道のりを、一日2〜3回往復することもあるという。その働き手のほとんどが、彼女のように遊び盛りの子どもたちだ。

「水は毎日の生活に必要なもの。その場しのぎではなく、確実な解決策を見付けなければならぬ。その上で日本のボランティアの存在は頼もしい」と水管理組合長のユヴさんは太鼓判を押す。「フィールドに一番近いところで活動できるのが協力隊の強み。みんなの思いに伝えられるようにがんばりたい」と櫻井さん。村の人々と向き合う、その真摯な姿が印象的だった。



一滴の水は命の源。人々が安全な水にアクセスできるよう、アフリカ各国で「水の防衛隊」が活動中だ

水管理組合のメンバーと協力してハンドポンプを修理





庭で布を織っているのが、グループリーダーの一人、フランシスカさん(左)。「日本人のボランティアから多くのことを学んでいます」

「女性たちが技術習得して変わっていく姿を見るのがうれしい。自分の力で生活を変えていくんだ」という強い意志を感じます」と山中さん。三代にわたるJICAボランティアの熱意が今、この土地に大きな花を咲かせている。

家事の傍ら、布を織ってお土産物を作り、販売している。しかし、穴あきやほつれなど商品の質が低い。観光客の「欲しい!」ものが生み出せていないのだ。

そこで、山中さんの前任の青年海外協力隊員とシニア海外ボランティアが、織物の染料の仕入れから色落ちしない染色技術までを指導。そして2011年、3代目として山中さんが赴任した。「2人のボランティアの指導のおかげで、女性たちは質の高い織物を作れるようになっていました。次に必要なのが縫製技術でした」と山中さん。ボランティアからボランティアへ、支援のバトンが引き継がれた。

女性たち自身で生活を変えるために

観光客が「欲しい!」と思うお土産物を作るには、まずは品質の向上から。穴あきやほつれがない商品を作る技術力を高めるため、山中さんは市内の15の女性グループを巡回して講習会を開くことに。ミシンを使って、ワンピースなどの洋服やバッグ、ポーチ、帽子などの作り方を教えている。

「女性たちはほとんど年上ですし、赴任したばかりのころは現地の言葉が理解できずに苦労しました」とにかく自分の技術を見てもらうしかない。山中さんは根気強く、不良品を見分けて直す方法を実際にやってみせた。そんな彼女の姿を見て、次第に頼ってくる人が増えてきた。講習会の参加者の一人、セレスティナ・バスケスさんは、「最初は何も縫えなかったけれど、ヒロコが丁寧に教えてくれたおかげでいろんな商品を作れるようになった」とうれしそうだ。

「女性たちが技術習得して変わっていく姿を見るのがうれしい。自分の力で生活を変えていくんだ」という強い意志を感じます」と山中さん。三代にわたるJICAボランティアの熱意が今、この土地に大きな花を咲かせている。

「女性たちが技術習得して変わっていく姿を見るのがうれしい。自分の力で生活を変えていくんだ」という強い意志を感じます」と山中さん。三代にわたるJICAボランティアの熱意が今、この土地に大きな花を咲かせている。



多くの観光客が訪れるアティラン湖

[上]人気商品の一つがバッグ。右上のバッグに飾りとして端切れの花を付けたのは現地の女性たちのアイデア
[下]ポンチョは、マフラー付きやフード付きなど、デザインのバリエーションを増やした



[右]講習会でショルダーバッグの作り方を教える山中さん。メンバーの家や商品を販売するお店の一角で行うことが多い
[左]縫い方の手本を見せながら指導。「女性たちがものづくりを楽しみ、向上心を持ってくれるようになりました」

グアテマラ from GUATEMALA

青年海外協力隊

暮らしを変えるものづくり

ミシンを使って、魅力的なお土産物を作れるようになってほしい!。青年海外協力隊の山中大子(おほこ)さんは、日本でデザイナーとして働いた経験を生かし、グアテマラの女性たちとものづくりに取り組む。

ボランティアがつなぐ支援のバトン

カタカタカタ。部屋の中に鳴り響くミシンの音。赤、青、緑と、色鮮やかな織物を使い、女性たちがバッグやポーチを作っている。

グアテマラ西部に位置するサンファンラグラーナは、マヤ文明の伝統を受け継ぐ人々が多く暮らす町。植物や昆虫などからとれる天然染料を使う昔ながらの織物は、この地に代々伝わる名産品だ。

この織物を活用した、ものづくりに奮闘する青年海外協力隊員がいる。

「マヤ民族のモチーフを使ったらどう?」

「ポンチョにフードを付けてみようか?」

現地の女性たちと商品のデザインを話し合っているのは、服飾隊員の山中大子さん。日本のアパレルメーカーでデザイナーとして経験を積み、生地やデザイン、パターン、縫製などの専門知識を身に付けた。「自分が作った洋服が商品になって、お客さんが買ってくれる。それが大きな自信になりました」。貧困に苦しむ開発途上国の女性にも、技術を身に付け、自分で生活を変えられることを知ってほしい。そう思い、協力隊への参加を決めた。

サンファンラグラーナは、世界一美しい湖とも言われるアティラン湖のほとりにある町。年間を通じて、国内外から多くの観光客が訪れる。

この地の女性たちは、農作業や





視覚障害者を対象にした指圧講座。まずは綱川さんがやってみせ、一人一人に直接指導する



地域の人々とも積極的に交流。「カルロスさんはがんの影響で体に痛みがあったため、マッサージで和らげると気持ちよさそうにしてくれました」

「最初は、日本とまったく異なる環境で戸惑いも多かった。でもある時から、細かいことを気にせず、これでいいんだ」と思えるようになったんです」と綱川さん。そして彼のそばには、いつも温かく、そして力強く支えてくれる幸子さんの姿があった。

「手から手へ」と技術を伝えながら、誰かの役に立ちたい。綱川さんは志を新たに、次の夢に向かって動き始めている。

東洋医学への理解を広めるイベントに参加し、東日本大震災への募金に行った綱川さん(右端)と幸子さん



「ニカラグアで東洋医学の指導者が必要とされていると知り、これだ、と。海外に行った経験はなく、語学も苦手だったので、技術なら体を使って教えられると思ったんです。不安はあったが、あきらめて後悔するよりも、挑戦したい。鍼灸マッサージ師としてニカラグアの首都マナグアで幸子さんと二人三脚の日々が始まった。

イアだった。

「ニカラグアで東洋医学の指導者が必要とされていると知り、これだ、と。海外に行った経験はなく、語学も苦手だったので、技術なら体を使って教えられると思ったんです。不安はあったが、あきらめて後悔するよりも、挑戦したい。鍼灸マッサージ師としてニカラグアの首都マナグアで幸子さんと二人三脚の日々が始まった。」

透したニカラグア。薬に頼らない治療法として注目されているが、それを正しく実践できる人材が不足している。

綱川さんが派遣されたのは、長年ニカラグアに住む日本人が学長を務める日本ニカラグア東洋医学大学。中米で唯一、東洋医学を学ぶ高等教育機関だ。綱川さんは正しい東洋医学の知識と技術を持つ人材育成に向け、授業内容の改善に取り組むことになった。

東洋医学では全身に361もの経穴(つぼ)があり、そこにはりを打ったり指圧して治療する。その正確な位置を知ることが、基本中の基本だ。「教授も学生も教科書で勉強しただけで、実際に体

に触らせると位置を正確に示せませんでした」。

そこで綱川さんは、実践的な技術の指導を強化することに。学生同士でつばにシールを貼り、正しい位置を覚えてもらうなどの工夫をした。同僚のレイ・カステイロ・ジョ教授とも確認し合いながら、実技を重視した教え方を伝えていった。

「ドクトールアキラ! つぼの場所はどこで合っていますか?」

「私にも指圧のコツを教えてください!」

綱川さんの手を引いては積極的に質問する学生たち。「東洋医学の技術を吸収したいという気持ち伝わってきました。やりがいを感じた瞬間です」と綱川

さんはほほ笑む。

さらには綱川さんの経験が発揮されたのは、視覚障害者が指圧の技術を学ぶ講座での指導だ。学生によって見え方も違えば、いつ視力を失ったかによって心理状態も違う。そんな彼ら一人一人を理解し、気を配れたのは、同じ経験を持ち、障害者教育に長年携わってきた綱川さんだからこそ。骨格や筋肉のつき方、つぼの位置、症状の見分け方、指圧方法を伝え、彼らが手に職をつけて自立できるようサポートした。

講座に参加したマルビン・マルティネスさんは「これまでは助けられる立場でしたが、技術を身に付ければ私も誰かの役に立てる。そうドクトールアキラが教えてくれました」と話す。講座の卒業生たちはクリニックを開設したりホテルに就職したりと、自立した生活を切り開いている。

「最初は、日本とまったく異なる環境で戸惑いも多かった。でもある時から、細かいことを気にせず、これでいいんだ」と思えるようになったんです」と綱川さん。そして彼のそばには、いつも温かく、そして力強く支えてくれる幸子さんの姿があった。

「手から手へ」と技術を伝えながら、誰かの役に立ちたい。綱川さんは志を新たに、次の夢に向かって動き始めている。

ニカラグア from NICARAGUA

東洋医学の力で 未来を切り開く

シニア海外ボランティア

鍼灸マッサージ師、盲学校の教員の経験を持つ綱川章さん。定年後の活躍の場として選んだのは、シニア海外ボランティア。中米のニカラグアで、東洋医学の技術や知識の普及に奔走した。



「視覚障害者4人が共同で指圧クリニックを開設!」

2012年1月、ニカラグアの大手新聞に大きな見出しが躍った。盲学校すらないこの国では、視覚に障害のある人々が仕事を持つのはそう簡単なことではない。ただでさえ失業率が高いこともあって、画期的なニュースだった。

実は、このクリニック開設の裏側には、ある日本人男性の支えがあった。シニア海外ボランティアの綱川章さんだ。

30歳の時、病気で視力を失ったが、「目が見えなくても、挑戦できることがあるはず」と、はり・きゆう・マッサージの技術と教授法を学び、盲学校で教員を務めた。

「周りの人の助けがあったから仕事を続けてこられた。定年を迎え、今度は自分が社会にお返しをしたい」。そう思っていた綱川さんに、若いころ海外でのボランティア経験があった妻の幸子さんが勧めたのが、シニア海外ボラン



指圧講座の卒業生によるクリニック開設を伝える記事。これをきっかけに講座に参加した人もいた



大学生に指圧の技術を指導する綱川さん(左から2人目)。「集中力が続かない学生も多かったので、学生同士でペアを組ませ、1、2、3と私が号令をかけて一斉に練習できるよう工夫しました」



in ウガンダ 道を直す【土のう活用法】

雨が降ってはぬかるみ、通行不能になってしまう道。農作物を作っても市場まで運べず、仲買人も買い付けに来ない…。そこで酒井樹里隊員（村落開発）が取り入れたのが、土のうを使った道の補修工事。ぬかるんだ部分の土を取って土のうを敷きつめ、押し固めて、表面を土で覆えば完了だ。コミュニティの道をみんなで協力して守っている。村で身近に手に入る土のうを使うことで、住民たちの意識も変わってきた。



in パレスチナ難民キャンプ（ヨルダン） 実践的な授業ができる【美術教材集】

パレスチナ難民キャンプでは、子どもたちの自己表現力をはぐくむため、JICAボランティアが美術や体育など情操教育を指導。現地の教員がより実践的な授業をできるように、シニア海外ボランティアの森本美鶴さんと5人の美術隊員が教員向けの教材集「Art for ALL」を作成。必要な材料、教える手順、完成作品が項目ごとに写真入りで解説され、それを使った授業方法が広まっている。



特集 JICAボランティア 世界に羽ばたけ! 草の根の外交官

JICAボ アイデア

モノが少ない開発途上国での活
JICAボランティアが生み出した
現地の人々の生活に役立つアイ

ランティアの 箱

動には“アイデア”が不可欠。

デアを一挙に紹介!



in タンザニア リサイクル布を使った【布草履】

タンザニア人のおしゃれは、キテンゲやカンガと呼ばれる布を使った洋服。仕立てた時に大量の布が余ってしまうが、これをリサイクルすればごみも減らせるはず。橋本史江隊員（環境教育）は、その端切れで布草履を作ることに。住民からは「ごみからモノができるなんて!」と驚きの声。エコバッグやポーチなども作るようになり、リサイクルの意識が根付き始めた。



in タイ 簡単・安いにおわない【ヤシ殻コンポスト】

増え続けるごみに対応できず、埋め立て地の不足が課題のタイ。飯塚紗彩隊員（青少年活動）は、家庭ごみの大半を占める生ごみに着目。発泡スチロールの箱にヤシ殻の粉末ともみ殻の炭を入れ、生ごみを分解するコンポストの普及に乗り出した。ポイントは、現地ですぐに手に入る材料で、誰でも簡単に作れること。1日で500グラムの生ごみが分解できると好評で、住民がごみ分別に積極的に取り組むようになった。



in ネパール 胎児の成長が一目で分かる【妊娠カレンダー】

「妊娠2カ月は赤ちゃんの成長に大切な時期。栄養のある食事を取ってくださいね」。大野典子隊員（保健師）が妊婦健診で使っているのが妊娠カレンダー。株式会社ベネッセコーポレーションの協力を得て、市役所の母子保健クリニックの同僚と改良を重ねて完成。最終月経日に合わせて円盤を回すと、出産予定日と現在の胎児の成長の様子がイラストで分かるようになっている。食事指導や衛生管理などのアドバイスがしやすいと評判だ。



in バヌアツ 野菜たっぷりのヘルシー【おやき】

子どもにも安心して食べさせられるものを作ってほしい。バヌアツの食べ物には塩分や化学調味料がいっぱい。そこで高橋詩野美隊員（看護師）が考案したのが、栄養バランスの取れた“おやき”。キャベツを炒めてショウガとコショウで味付けし、小麦粉の生地で包んで焼くだけ。おやきの作り方を学ぶための料理教室を開き、生活習慣病予防のための10か条も伝えた。



in エクアドル 「水の循環」を動いて学べる【体操】

水の循環を楽しみながら学んでほしい。そのために田中鏡介隊員（環境教育）は、小学生を対象にした体操を思い付く。子どもたちがふんずけるのは“一滴の水”。海から蒸発して雲になり、雨として地面に降り注ぎ、地下水、川へと変化していく流れを体の動きで表現する。蒸発するシーンでは、しゃがんでから大きく背伸びをし、水が上昇していく動きにするなど工夫。楽しみながら環境について学びきっかけとなった。

in バングラデシュ IT技術者のレベルを測る【資格試験の導入】

経済発展に向けてIT産業に力を入れるバングラデシュ。しかし情報処理の国家資格がなく、IT技術者の能力を測る“物差し”がない。そこで小原史丈隊員をはじめコンピューター技術隊員が情報処理技術者試験（ITEE）を取り入れようとして奔走。アジア各国でも採用されているこの資格があれば、IT技術者として国内外での就職のチャンスが広がる。大学やイベントで説明を行い、ITEEの意義をアピール。2014年の導入を目指してJICAが支援を続けている。



その汗と涙が “今”の力に

JICAボランティアとして過ごした日々。
数々の困難や壁を乗り越え、現地の人々と共にした喜びは、
彼らの“今”の力となっている。



秋田県八峰町
手這坂集落在住

木村 友治さん
KIMURA Tomoharu



帰国後に移り住んだ手這坂には、日本の原風景が広がる

農業の視点で“豊かさ”を受け継ぐ

25歳から学び始めた農業を通して、世界の人々と触れ合い、自分の視野を広げたい。その舞台として選んだのが青年海外協力隊。派遣国のパラグアイでは、農業高校や地域の農家、小学校などで有機農業のノウハウや食育を指導しました。現地の人々と“同じ釜の飯”を食べて過ごすうちに、家族や地域の人々と支え合い、自然と触れ合いながら暮らす生活こそ、真に豊かなのではないかと感じました。

今の日本に目を向けると、昔から伝わる“知恵”が消え、農業に携わる人が減りつつあります。パラグアイの生活を経験して、自分の生まれた国で、自然と共に生きる生活を一から始めたいと思いました。帰国後は、過疎化が進み10年以上無人だった秋田県の手這坂集落に移住しました。築100年以上のかやぶきの家が残る村はまさに日本の原風景。パラグアイでは物が壊れたら自分で直すのが当然だったように、周辺地域の人々に助けられながら家を直し、田んぼや畑を作っています。

日本に根付く生活の知恵を受け継ぐことで“豊かさ”を取り戻す。今後は、田植えなどの体験教室を開き、日本の子どもたちに農業の大切さを知ってもらいたいです。



パラグアイの小学校では敷地内に菜園を作り、子どもたちに食の大切さを教えた

ものづくりの力で 釜石の復興を目指す

私の故郷、岩手県釜石市に甚大な被害を与えた東日本大震災。津波で何もかもなくなってしまった町を見て、復興のためには地元の人たちが働ける場が必要だと直感しました。日々の暮らしを支えるには収入が必要でし、働くことが生きる力にもなるからです。

そう確信できたのは、カンボジアやチュニジアでのJICAボランティアの経験があったから。現地の職業訓練校の教員などを対象に縫製技術を教えたのですが、技術を身に付け、自分で商品を作って販売できるようになると、彼女たちの表情は見違えるように明るく自信に満ちてきました。

このアプローチを生かせば、地元を元気にできるのではないかと。釜石はかつては製鉄業、今は漁業が盛んな町なので、女性の仕事はあまり多くありません。そこで考えたのが、縫製工房の立ち上げ。釜石の民族舞踊「虎舞い」をモチーフにしたぬいぐるみやコースターなど、“釜石ブランド”の商品を地域の女性たちと作って販売するのです。今年1月に工房にマシンが入り、まさにこれから。将来的にはカフェや店舗も併設し、地域の人々が集うことができる場にするのが夢です。カンボジアやチュニジアでの経験を生かし、女性たちと釜石を盛り立てていきます。

★釜石マダムミコ工房のホームページはこちら→kamaishimikko.com/

釜石マダムミコ工房

川村 美也子さん
KAWAMURA Miyako



釜石の工房で商品を作る川村さん(中央)。「JICAボランティア時代に培った周りの人を巻き込む力の大切さを実感しました」



商品の一つ、釜石に伝わる虎舞いをモチーフにしたぬいぐるみ



協力隊員として、縫製技術を教える川村さん(左)。カンボジアの伝統布クロマーを使い、お土産物づくりに取り組んだ



海外のスタッフに部品の状態を検査する技術を教える菊田さん(中央)



菊田さんから学び、ジンバブエの技術者の間では整備技術に対する意識が高まった

ヤマハ発動機
株式会社

菊田 聡さん
KIKUTA Satoshi

機器を大切に使う技術を伝える

自動車整備士として働いて5年。その技術を生かし自分を成長させたいと思っていた時、友人に勧められたのが青年海外協力隊でした。

派遣国はアフリカのジンバブエ。私の活動内容は、ジンバブエ運輸省陸運局で車検用の機材を維持管理すること。しかし、肝心の機材が壊れてまったく動かないという予想外のスタートでした。自分でできることを探さなくては。英語で交渉したり、配属先の公用車の定期点検の方法を伝えたりと、がむしゃらに駆け回った日々でした。今思えば、順風満帆ではなかったからこそ、何事にも臨機応変に対応する力が身に付いたと思います。

海外で働くための国際感覚やタフさ、チャレンジ精神など、学ぶことの方が多かった協力隊。もっと海外にかかわっていきたくて、帰国後はヤマハ発動機株式会社に就職しました。これまで約30カ国を飛び回り、市場調査をしたり、販売代理店のスタッフに商品の修理・維持管理方法を指導したりしています。

海外のスタッフと仕事をすると、日本での“当たり前”が通じないことも多い。それは協力隊での活動中にもよくありました。国境を越えて信頼関係を築くためには、相手の文化の違いを理解し尊重することが大切。協力隊で得た学びを今も実践しています。



ベトナムの提携先企業を訪れ、現地の担当者とのミーティング

PLAYERS

国際協力の担い手たち

テラインターナショナル株式会社 経験がビジネスに“生きる”

コンピューターシステムの開発を手掛けるテラインターナショナル株式会社。

開発途上国で奮闘した日々はビジネスにも生きるはず一。

さらなる海外展開に向けて、JICAボランティア経験者の活躍が光る。



シニア海外ボランティアとして、マラウイの技術訓練校で、コンピューターネットワークについて講義する西村さん

社員を抱える会社へと成長した。

「この機能を入れた方が業務の効率
が良くなるのでは？」
「この処理ツールを使ってみては？」
東京・池袋に本社を構えるテライン
ターナショナル株式会社の一室。コン
ピューターシステムの開発が専門の同
社では、この日、ビジネスパートナー
であるベトナム企業から研修員が訪れ
ていた。システムの詳細設計やプログ
ラミングの手法を学ぶことが目的だ。

指導している社員は、慣れない日本
で学ぶ研修員を気遣いながら、細かく
アドバイスをしている。そんな彼らは、
実は、青年海外協力隊の経験者。「海
外のひととのコミュニケーションにも慣
れていますし、文化の違いを超えて、
仲間と協力する能力に長けています
ね」。そう評価するのは、宮本一成代
表取締役社長。同社はJICAボラン
ティア経験者を多く採用しているが、
宮本社長もまた、協力隊の経験者だ。
1988年から2年間、コンピューター
技術隊員としてヨルダンに赴任し、
国立大学で、職員の給料計算や学生の
成績管理などのシステム開発に携わっ
た。そして帰国後の91年、システム開
発を通して社会に貢献したいと、協力
隊経験者2人とテラインターナシヨナ
ルを立ち上げた。これまでにさまざま
なシステム開発を手掛け、170人の

現在、行政手続きの電子申請シス
テム、携帯電話の通話に欠かせないサ
ーバーのシステムなどを開発。さらな
る事業拡大を目指して、人件費が安い
海外企業にシステム開発を委託する
「オフショア開発」にも取り組んでい
る。これまで提携を結んだ企業は、中
国、韓国、ベトナム。社員が行き来し、
共同開発を進めている。

企業が求める JICAボランティアの力

海外との仕事が増えるほど、国際的
な感覚を持ちながら仕事をできる、グ
ローバル人材が必要。「JICAボ
ランティア経験者はその典型です」と
宮本社長は話す。その言葉を裏付けて
いるのは、JICAボランティアの経
験で培われるさまざまな力だ。「活動
中は、文化も言葉も異なる人々と一
緒に働くことになる。時にはぶつかり
合ったりしながら、違いを受け入れる
心をはぐくんでいくのです」。このコ
ミュニケーション能力が、ビジネスの
世界でも役立つという。

宮本社長自身も、協力隊での2年間、
さまざまな困難に直面した。そして、
それを乗り越えるには、周りの人間を
巻き込み、仲間を増やすことがカ
ギだと実感したのだ。「システム開発
でも、完成までの過程にはさまざまな
困難がある。へこたれずにやり遂げよ



入社前には青年海外協力隊にも参加した西村さん。タイの教育大学でコンピューター技術を指導した

中国人の社員と共にオフショア
開発の戦略を練る宮本社長
(左)と西村さん(左から2人目)



うとする強い意志が必要なのです」。
JICAボランティアへの参加を希
望する社員がいたら、積極的に送り出
している。システムエンジニアとして
自分の技術を途上国に伝えたい。そ
んな思いを昔から抱いていた西村靖夫
さん。現職参加制度※を使って、シニ
ア海外ボランティアに参加した社員の
一人だ。「マラウイでの活動を通して、
なるほど、そんな考え方もあるんだ」

と視野が広がり、多角的に物事を見ら
れるようになりました。一つの機能に
こだわり過ぎるのではなく、一部を簡
略化してでも全体のシステムバランス
が良くなるようにするなど、システム
開発の幅も広がりました」と自らの経
験を語る。

JICAボランティア経験者が多く
いることで、社内ではボランティアや
途上国の話題が挙がることも多い。社
員が世界に目を向け、途上国支援に興
味を持つきっかけになっている。
グローバル化のカギを握る人材とし
て、JICAボランティア経験者に期
待を寄せるテラインターナショナル。
彼らの力を武器に、さらなる海外展開
を進めていく。

NEW!

民間連携ボランティア制度

海外展開に力を入れる民間企業に必要なとされるのが、多様な価値観、行動力を持った“グローバル人材”。そんな企業にJICAボランティアを活用してもらおうと昨年スタートしたのが「民間連携ボランティア制度」。受入国、期間、職種など、各企業のニーズを踏まえてアレンジ可能な“オーダーメイド派遣”が特徴。お問い合わせは、JICA青年海外協力隊事務局 参加促進・進路支援課(jvpc@jica.go.jp)まで。

※休暇などの扱いで、所属先に身分を残したままJICAボランティアに参加できる制度。



農家や地域住民の意見を取り入れて建設計画を作るワークショップの手法を学ぶ

かんがい技術



川をせき止めて水位を上げ、水路に水を取り入れる宮城県内のかんがい施設を視察

設の計画・施工・維持管理のノウハウを伝えるというもの。さらにJICA草の根技術協力事業を通じて、現地での測量技術の指導や宮城県での研修を実施し、マラウイでのかんがい技術の普及を全面的にバックアップしている。

県ぐるみで取り組む人づくり

2010年、一期目の協力隊員として赴任したのが、宮城県庁で農業土木を担当していた菅野将央さん。「マラウイのかんがい整備はまさにこれから。だからこそ、自分も原点に立ち返って学べることもあるはず」と手を挙げた。

配属先はデッサ県かんがい事務所。この地域は川の水をうまく利用できれば、農地として発展するポテンシャルが高い。かつて日本の支援で作られた国内最大のブワンジエバレーかんがい施設もある。

ところが、かんがい事務所の職員たちには、かんがい施設的设计・施工・維持管理のノウハウが少ない。そのため、大雨で壊れたり土砂がたまって使えなくなっても自分たちで修理できず、そのまま放置されてしまう。農業自体が行えなくなってしまうことも少なくない。

かんがい施設を効率的に整備し、農家の人々が安心して農業を行うためには、専門的な知識を持った人々が

必要。そこで菅野さんは現地の職員と共に、建設が計画通り進んでいるかを測量して確認すると同時に、村を巡回して定期点検や修理方法を指導している。また、モデル地区を設けて、施設の建設計画から施工、維持管理までの一連の手順を実践。現地の人々にノウハウを身に付けてもらっている。

「何事にも時間がかかり、思い通りにいかないことも多い。それでも、施設ができて農家の人々が作付けの予定をうれしそうに話してくれると、やりがいを感じます」と菅野さんは話す。

また、宮城県で行われる研修では、県内各地にあるかんがい施設の視察、水路の測量方法を学ぶ実習が組み込まれている。農家や地域の人々の意見を反映した建設計画づくりのノウハウも学んでもらう。「約40年前の施設を農家の皆さんが協力して守り、今も使っていることに驚きました。維持管理の大切さを実感しました」と、研修員は口をそろえて言う。

「この取り組みは宮城県にとっても意義あること」と強調するのは宮城県農林水産部の日置秀彦さん。「協力隊員は十分にモノがない環境で、現地の人々とコミュニケーションをとり、交渉し、目標の達成に向けて奮闘している。この経験を経て、国際的に活躍できる人材として、宮城を盛り上げてほしい」。彼らが両国の懸け橋となり、マラウイの農業を通じて、人々を笑顔にしている。



宮城県が供与した機材を使い、新しい水路を作るために土地の高低差を測量中

青年海外協力隊として派遣された菅野さん(中央)。農家のかんがい施設への期待は高く、興味津々だ



で農家の人々を笑顔に

日本有数のコメの産地として知られる宮城県。この土地のコメ作りを支えてきたのは、水を確保するかんがい技術だ。その知見を今、青年海外協力隊員として、県の職員がマラウイに伝えている。

宮城県



宮城県

面積7,285.77km²。人口約232万人。稲作をはじめ農業が盛ん。その強みを生かし、農業土木分野でのJICA専門家の派遣や、JICA草の根技術協力事業を通じて中国吉林省で農業水利組合の設立・運営強化を支援した経験を持つ。また、県出身の青年海外協力隊員を「みやぎ海外絆大使」に任命。海外では県の魅力を発信し、県内では開発途上国の情報を県民に紹介してもらうことで、国際化にも力を入れる。



宮城県で行われた研修で、職員に指導を受けながら水路の測量方法を学ぶ

農業の発展を左右する水

ひとめぼれ、ササニシキ、まなむすめ。日本有数のコメの産地、宮城県で生産されている代表品種だ。2012年のコメの収穫量は約40万トンにのぼる。平野が広がる宮城県は、北上川などが運ぶ肥沃な土と豊富な水に恵まれ、コメ作りに最適な地域。江戸時代から積極的に新田開発が行われてきた。

コメを作るために欠かせないのは、水。そこで先人たちが工夫を重ね、培われたのがかんがい技術だ。川をせき止めて水をため、必要なときに水路へ流すことで、水を農業に有効に利用できる。

このノウハウをまさに必要としているのが、水不足に悩むアフリカだ。2008年に開催された第4回アフリカ開発会議(TICAD IV)でも議論に上がったアフリカの食料不足。その解決のカギを握るのは、やはり水。安定した水の確保なしには、食料問題の解決への道は切り開かれない。しかしアフリカでは、かんがい施設の整備が遅れが、食料問題の解決に影を落としている。

そこで宮城県とJICAが立ち上げたのが「みやぎ国際協力隊プロジェクト」だ。舞台はアフリカ南東部のマラウイ。計6年間にわたり、農業土木の技術を持つ県の職員3人を青年海外協力隊として現地に派遣し、かんがい施設

より満足度の高い JICAボランティア事業をつくりたい



JICA青年海外協力隊事務局
アジア・大洋州課

廣澤 仁

HIROSAWA Jin

大学卒業後、1999年に青年海外協力隊に参加。2004年にJICAに就職。国際緊急援助隊事務局・社会開発部(当時)、経済基盤開発部、バンングラデシュ事務所を経て、2011年9月から現職。

JICAボランティアの活動を支えるJICA青年海外協力隊事務局。廣澤仁さんは自らの協力隊経験と在外事務所での経験を踏まえ、受入国とボランティア双方の満足度を追及している。

協力隊参加を通じて 教員不足の背景を知る

大学卒業後の進路を考えていた時、街中で青年海外協力隊のポスターを目にした。世界には理数科の教員が足りない国がある。その事実を知り、理系大学卒という経歴を生かして貢献できることがあるかもしれないと、応募を決意しました。

派遣されたのは、ガーナ農村部の公立高校。現地の人々との暮らしや日々の授業を通じて、身をもって、学校や生徒を取り巻く現状を感じました。一家の期待を背負って進学してきた生徒たち。その真剣な思いとは裏腹に、基礎学力がとても低かった。その他にも、授業料が払えず退学になったり、家の手伝いで時間通りに通学できなかったり、病名が分からない病で命を落としてしまったり。生活インフラが整備されていない村での生活は厳しく、ガーナの教員たちにも敬遠されがちでした。「教員が足りない」という事情の裏側には、そんなガーナが抱える課題が凝縮されていたのです。この状況を改善するためには、問題の根源を探り、もっと包括的に改善していかなければならない。そこで帰国後、JICAの社会人採用を目指すことにしました。

在外事務所での再認識した、 JICAボランティアの輝き

4年半の本部勤務を経て、2008年にバンングラデシュ事務所へ赴任。廃棄物と飲料水にかかわる事業を担当しました。農村部では、飲み水の主な水源がヒ素に汚染され、住民たちの病気の原因になっていました。日本はこの分野で10年にわたってバンングラデシュ政府を支援してきましたが、関係省庁の能力強化、住民の啓発活動をさらに進める必要がありました。

この2つの分野で、両国が構築してきた住民による水管理のモデルケースを、現場のニーズにより合致するようカスタマイズできるのは、まさに草の根で活動するJICAボランティアではないか。現地政府と話し合いを重ねて、協力隊員2人の派遣が実現しました。

隊員たちはイスラムの風習や異文化に戸惑いながらも、現地語であるベンガル語を磨き、人々の信頼を得ながら、配属先やコミュニティの一員になっていきました。彼らが得る情報は豊富かつリアルで、人々を巻き込む行動力も素晴らしかった。協力隊に参加してから10年、JICAボランティアの強さとしなやかさを再認識し、事業のさらなる可能性を実感しました。

協力隊と在外事務所の経験を ボランティア事業でつなぐ

現在は、青年海外協力隊事務局で東南アジアを担当しています。この地域は協力隊員に加え、シニア海外ボランティア(SV)の派遣数が多いのが特徴。また、メンバーへのSV派遣開始や、民間連携ボランティアの第一号をベトナムに試行的に派遣するといったホットな動きもあります。私はJICAボランティア事業がより良いものになるよう、派遣計画の策定、制度改善などに取り組んでいます。

事業の主役はボランティア。彼らの満足度が高いほど、現地の活動の貢献度向上にも通じます。「貴重な人生の一部を捧げるのだから、多くのことを得て、多くのことを残してほしい」。私自身が、人生に大きな影響を与える経験をさせてもらったことその思いです。

協力隊と在外事務所、両方の経験を携えて、これからもより良い事業の在り方を目指して邁進していきます。



ガーナでの協力隊員時代



タイの援助機関でJICAボランティアの派遣について意見交換を行う廣澤さん(左端)

国際緊急援助隊・医療チーム、30周年から新たなステージへ

01



セミナーでは歴代のJDR医療チーム関係者が講演

1月20日、国際緊急援助隊（JDR）医療チームの前身である国際救急医療チーム（JMTDR）の設立30周年を記念するセミナーがJICA関西（神戸市）で開催されました。JDRは、海外で地震や津波、洪水などの災害が発生した時、人命救助や医療活動などを実施する組織。医療チームは、全国の有志の医療関係者により構成されています。セミナーの第一部では、JDR医療チーム支援委員会の甲斐達郎委員長をはじめ、歴代の委員長らがJDR30年の歴史を振り返りました。カンボジア難民の救済をきっかけに、1982年にJMTDRが設立された経緯、当時からかわった人たちの思い、現場での苦労話などが語られました。



JDR医療チームは、次の派遣時にテント内で大規模な手術ができるよう研修を進めている

また、84年のエチオピア干ばつ被害、2004年のスマトラ沖大地震・インド洋津波、2010年のハイチ地震など、これまでに計60チーム、のべ約9000人が被災地で行ってきた緊急援助活動について紹介。こういったJDRの長年の経験が、2011年の東日本大震災での支援活動に生かされたことも強調されました。

第二部では、JDR医療チーム総合調整部会の大友康裕部会長が講演。チャーター便を導入することで迅速な派遣が可能になったこと、さらに高度な医療活動を実施できるよう、手術機材の導入の準備を進めていることを紹介しました。また、医療チームのメンバーが設立したNPO法人災害人道医療支援会の鶴岡卓顧問は、JDR経験者が海外の災害現場で活躍している事例について、看護師の石井美恵子さんは、東日本大震災で「災害支援ナース」の体制を構築した活動について報告しました。また、講演後には参加者との意見交換が行われました。

より効果的な緊急援助活動の実現に向けて、JDR医療チームの今後の活動に期待が寄せられています。

02

海外投融資事業、再開後初のインフラ事業がスタート

1月30日、JICAは、海外投融資を活用したベトナムのインフラ整備事業に調印しました。海外投融資は、開発途上国の開発を促進するため、民間企業が実施する事業をJICAが出資や融資を通じて支援するもの。昨年10月に本格再開されてからは、本事業が初めて調印される案件になります。

ベトナムでは一般的に、工業団地からの排水による公害、工業用水の需要増加による地下水の枯渇が深刻な問題になっています。本事業は、海外投融資を活用して、株式会社神鋼環境ソリューションと神鋼商事株式会社

が現地企業と共に、工業団地向け排水処理や給水事業などを実施するものです。環境配慮を徹底した工業団地を整備することで、ベトナムの産業発展と環境対策の両面に対応した持続可能な成長支援に加え、日本企業の投資環境整備にもつながることが見込まれています。

今後は、神戸市が浄水場の運営管理に参画する予定。官民連携によるパッケージ型インフラ輸出のモデルケースとなることが期待されます。JICAは引き続き、海外投融資事業に力を入れていきます。

03

大阪で「ワン・ワールド・フェスティバル」開催

2月2〜3日、関西地区最大の国際協力のイベント「ワン・ワールド・フェスティバル」が大阪国際交流センターで開催されました。会場では2日間にわたり、関西を拠点に国際協力を行う企業や大学、NGO、国際機関などがブースを出展。国内外での国際協力の取り組みを紹介しました。

JICAも来場者に国際協力に関心を持ってもらえるよう、さまざまな企画を準備しました。JICA関西のブースでは、各国での取り組みやボランティア事業をパネルで展示。NGO、国際機関、JICAが共同で実施している「なんとかしなきゃ！プロジェクト」のブースでは、来場者に書いてもらった世界へのメッセージを世界地図に貼り付けました。

メインステージでは、「なんとかしなきゃ！プロジェクト」著名人メンバーの真戸直人さん（アンダーグラフ）と、田中雅美さんが

そろって登壇。それぞれが視察したマラウイ、タイについて報告するとともに、国際協力に携わるようになったきっかけについて話しました。トークの後には、真戸原さんの弾き語りにも多くの人が聞き入っていました。

毎年恒例、医師の桑山紀彦さんの「地球のステージ」では、音楽と語りでアフリカの

今、が伝えられ、昨年ウガンダを視察した国際協力レポーターの芝山葉奈さん、公益社団法人日本国際民間協力会（NICCO）の折居徳正事務局長とのトークショーも行われました。



JICAブースを訪れた来場者



顕微鏡で蚊の種類を判別。フィールドワークや実験室での作業を通じて、現地の人々に技術と知識を伝えている

まず、最初に訪れたのは、首都リロ

リロウイはアフリカ南東部にある内陸国。北海道と九州を足したくらいの大ささで、人口の約8割が農業に従事している。1月は雨期ということもあり、少し肌寒い。「先人観は持たずに、ありのままのマラウイを見て感じたい」と真戸原さんは語った。

たな出会いへの期待と、自分には何が
できるのかという思いが頭の中を駆け
巡っていた。

でも最も貧しい地域の一つであるド
ワ島の病院。青年海外協力隊員の竹口
美穂さんが、栄養士として、患者や地
域の住民を対象とした栄養指導、栄養
改善などに取り組んでいる。

真戸原さん、前川
さんらの活動について聞き、「日本人

この日は5歳児以下の健診のため、
たくさん母親と子どもが集まってい
た。竹口さんは健康に必要なことを伝
えるため、病院スタッフと「ZAMA
GULU(いろいろな食べ物を食べよ
う)」という歌を作った。6つの食品群
の名前を歌詞に盛り込んで、健診の時
にお母さんたちと歌って覚えてもら
うためだ。即興で真戸原さんもギター片
手に参加。「マラウイのお母さんた
ちは声も大きいし、歌もうまいな
あ」。そう楽しそうに話してくれた。

この日は5歳児以下の健診のため、
たくさん母親と子どもが集まってい
た。竹口さんは健康に必要なことを伝
えるため、病院スタッフと「ZAMA
GULU(いろいろな食べ物を食べよ
う)」という歌を作った。6つの食品群
の名前を歌詞に盛り込んで、健診の時
にお母さんたちと歌って覚えてもら
うためだ。即興で真戸原さんもギター片
手に参加。「マラウイのお母さんた
ちは声も大きいし、歌もうまいな
あ」。そう楽しそうに話してくれた。

真つ青な空を仰いだ。

真つ青な空を仰いだ。

真つ青な空を仰いだ。



竹口さんが活動している病院でアンダーグラフの「ツバサ」を一緒に歌う

「ア
せんか？」
人気ロックバンド、アンダーグラフ
のヴォーカル真戸原直人さんに、その
声が掛かったのは数カ月前のこと。ア
ーティストとして社会に貢献したい。
そんな思いを抱き、2008年からC
Dの売り上げの一部を開発途上国の子
どもたちのワクチン購入に充てている
真戸原さん。「なんとかしなきゃ！プロ
ジェクト」※の著名人メンバーでもある
彼は、「ワクチンの届け先の子どもたち
に会いたい」という夢がかない、昨年
10月にミャンマーを訪問。さらに今回
アフリカへの旅立ちの機会を得て、新

特別レポート

文=鈴木由佳里 (JICA広報室)



教員養成校で体育の授業や部活動の指導方法を教える秋本啓太隊員の活動も視察 (写真提供: 杉山遥)

真戸原直人さん アフリカの大地を 踏みしめて in マラウイ

アフリカ南東部の内陸国マラウイ。
1月にこの国を訪れたのは、
日本のロックバンド、アンダーグラフの真戸原直人さん。
初めてアフリカの大地を踏みしめた彼は、
現地の人々との出会いを通じて何を感じたのだろうか。



聴覚障害者の学校を訪問。日本から持ってきたサッカーボールをプレゼント。子どもたちとグラウンドでサッカーを楽しんだ

※途上国の現状について知り、一人一人ができる国際協力を推進していく市民参加型プロジェクト。実行委員会は、NPO法人国際協力NGOセンター(JANIC)、JICA、国連開発計画(UNDP)。

ココシリ

「ここが知りたい」
国際協力に関する
いろんなトピックを
分かりやすく解説します！

「平成25年度政府予算案」 成長と経済基盤の強化を ODAで戦略的に実現

ODA政策



日本の支援で建設されたインドネシアの橋(上)とミャンマーの小学校(下)。
インフラ整備とミャンマー支援はODA外交のカギとなる

平成25年度ODA予算(政府案)

外務省所管	一般会計
無償資金協力	1,642億円 (1.6%増)
技術協力(JICA運営費交付金)	1,469億円 (1.1%増)
分担金・拠出金	499億円 (2.5%減)
その他	601億円 (0.4%増)
計	4,212億円 (0.7%増)

(注)カッコ内は前年度比。四捨五入の関係上、合計に不一致あり。

平

成25年度外務省ODA予算案(政府案)は4212億円、3年連続で増額。うち技術協力予算(JICA運営費交付金)は4年ぶり、無償資金協力予算は3年連続の増額となった。今回の予算編成の第1の柱として掲げられたのは、普遍的な価値に基づき、戦略的な外交をダイナミックに展開していくべきだという動き。その一環として、民主化・国民和解を進めている国に対しては、戦略的に支援を実施するためのODA予算を計上した。具体的には、フィリピンの海上保安能力強化などに25億円、法制整備・民主化支援に4億円を計上している。

また「人間の安全保障」の推進に向けて、「第5回アフリカ開発会議(TICAD V)」を念頭に置いたアフリカ支援を強化。日本企業の要望を踏まえ、人材育成、配電網整備、幹線道路整備などアフリカの成長に資する事業を中心に630億円を措置した。これに、環境防災対策やミレニアム開発目標(MDGs)達成などの外交課題を合わせれば、アフリカ関連では、平成24年度(無償資金協力・技術協力の予算執行目安額は960億円)を上回る規模の予算が全体で確保されることになる。

また、ミャンマーの日本企業展開支援に向けて、中央銀行の情報通信整備、ヤンゴン水道改修などに66億円を計上。ミャンマーについては、全体で総額200億円程度のODAを想定(平成24年度は約100億円程度)している。また、東日本大震災の被災地の復

興支援として、途上国の要望を踏まえた工業用品などの供与に20億円を措置した。平成25年度の政府全体のODA予算は、対前年度比39億円減(0.7%減)の5573億円となった。財務省所管の有償資金協力勘定出資金の減少(63億円減)が主な要因とされているが、過去の円借款案件の貸付金の回収を踏まえたもの。円借款の事業規模自体は9150億円(対前年度比350億円増)を確保している。平成25年度は、TICAD Vの開催をはじめ、日本が国際的な舞台でのプレゼンスを発揮できる機会も多い。日本政府はODAを外交の手段の一つとして、今後も着実に事業を実施していく方針だ。

日

本モンゴル両政府は1月8日、「二国間オフセット・クレジット制度」に関する二国間文書に署名した。日本政府が提唱する同制度の導入を決めたのは、モンゴル政府が初めて。関係者からも高い関心が寄せられている。

同日に首都ウランバートルで行われた式典では、日本の清水武則駐モンゴル大使とモンゴルのサンジャースレン・オヨーン自然環境・グリーン開発大臣が同文書に署名した。この他、日本側からは外務省や経済産業省、環境省などの関係者、モンゴル側からはトルガ自然環境・グリーン開発副大臣、M・ソノンビル・エネルギー大臣らが出席。式典終了後には、同国政府関係者を集めて、制度の詳細を説明するセミナーも実施した。

「二国間オフセット・クレジット制度」 モンゴルと連携し 温室効果ガス排出削減に貢献!

温室効果ガス排出削減のための技術、製品、システム、サービス、インフラなどによって実現した温室効果ガス削減目標の達成に活用するもの。途上国の状況に応じて、柔軟かつ迅速に技術移転や実施体制づくりに貢献できる点が特徴だ。日本はこれまで、国際的な議論などを通じて、同制度を提唱してきた経緯がある。今後はさらに、こうした制度などの積極的な活用を通じて、世界全体の温室効果ガス排出削減に貢献していく考えだ。

現在、モンゴルに加えて、バングラデシュやベトナム、インドネシアなどとも「二国間オフセット・クレジット制度」の導入に向けた協議を進めている。これらの国々では、具体的なプロジェクトについて実現可能性を測る調査などを実施している。

6

月1〜3日に開催される「第5回アフリカ開発会議(TICAD V)」を前に、開催地の横浜をはじめ、日本各地でアフリカ熱が高まっている。

TICADは「Tokyo International Conference on African Development」の略。日本のイニシアチブで1993年に第1回が東京で開催されて以降、5年ごとに首脳級会合を日本国内で実施してきた。目的はアフリカの「オーナーシップ(自助努力)」と国際社会との「パートナーシップ」を重視した開発の実現。日本、アフリカ諸国のほか、アフリカ開発に取り組む国際機関や各国の援助機関、企業、NGOなどが集まり、アフリカの抱える課題や対策を議論する。

「第5回アフリカ開発会議(TICAD V)」 “躍動するアフリカ”をテーマに

で、いまだ域内の人口の約半数が1日1ドル25セント未満で生活しており、紛争や感染症の脅威にさらされる国や地域も少なくない。そこで、TICAD Vでは「躍動するアフリカと手を携えて―質の高い成長を目指して―」をテーマに、①強固で持続可能な経済、②包摂的で強じんな社会、③平和と安定の3つを柱に据えて議論を展開。アフリカ経済・社会の包括的な発展を目指すとともに、日本企業の新たなビジネスチャンス拡大にもつなげたい考え。6月の開催までに、日本各地では関連のセミナーやシンポジウム、展示会などのサイドイベントが予定されている。

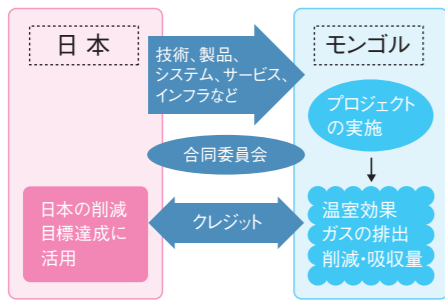
前回のTICAD IVで日本が公約した目標「2012年までにアフリカODAと投資額を倍増する」については、着実に達成に向けて取り組んでいる。



両国の政府関係者が一堂に会し、二国間文書への署名が行われた

二国間オフセット・クレジット制度

開発途上国への温室効果ガス排出削減技術、製品、システム、サービス、インフラなどの普及や対策を通じて、実現した温室効果ガス排出削減・吸収への日本の貢献を定量的に評価し、日本の削減目標の達成に活用する。



第5回アフリカ開発会議(TICAD V)

開催日時：2013年6月1日(土)〜3日(月)
開催地：横浜市

主なテーマ

「躍動するアフリカと手を携えて―質の高い成長を目指して―」

- ① 強固で持続可能な経済
- ② 包摂的で強じんな社会
- ③ 平和と安定



前回の「第4回アフリカ開発会議(TICAD IV)」にて、TICAD Vでは来日したアフリカの首脳陣を交えてさまざまなサイドイベントが開催される予定

政策

国際会議

日の出とともに働きに出る女性たち。アンゴラとの
国境近くに位置するキンベセには、1898年開通
のマタディ・キンシャサ鉄道が通る

地球ギャラリー vol.54

Democratic Republic
of the Congo

【コンゴ民主共和国】

写真・文＝久野真一（JICA広報室）



国を支える一本道



キンシャサ中心部の市場では、カラフルな衣服や靴が売られている



キンシャサの中心部。コンゴ川の港から荷揚げした衣料品を積み、渋滞した道路を横切り市場へと運ぶ

地球ギャラリー vol.54



街中にはローラースケートに興じる若者の姿も

どの国においても、国道1号線にはその土地の象徴的な歴史が刻まれている。コンゴ民主共和国も然り。首都キンシャサから同国最大の外港の街、マタデイをつなぐ「一本道」をたどった。

世界第二位の流域面積を持つコンゴ川の下流域、大西洋から約350キロメートル内陸にあるキンシャサ。市街地には高層ビルが建ち、片側4車線の大通りでは信号機が点滅している。スーツ姿の人、大きな荷物を持ち、スニーカーで引く人…。さまざまな人が入り混じり、車列の間を縫うように歩いている。

目に入ってくる光景のすべてが、

私が抱いていたイメージと大きく違った。

物があふれる市場でひととき目を引いたのは、女性のファッション用品だ。若い女性が連れ立ってかつ歩する姿は、日本でいう原宿周辺と変わりない。豊かさすら感じる。

しかし、市場の責任者の男性はこう訴える。「一刻も早く日本に近づきたい。もつと近代的な市場にして、国の発展を支えたいんだ」と。

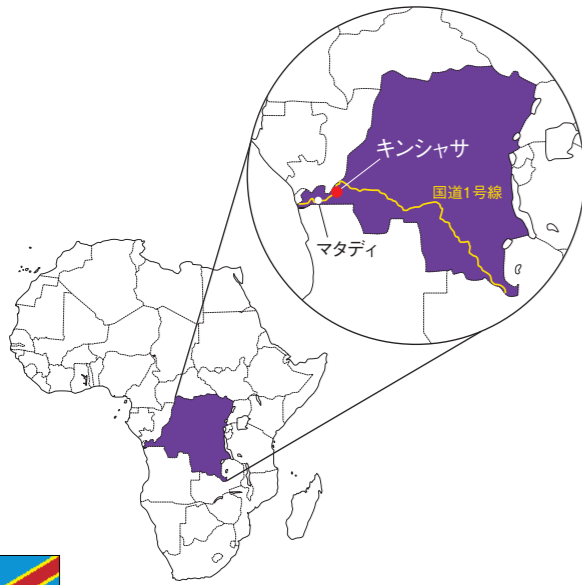
国際的なプロボクサー、モハメド・アリが、キンシャサの奇跡を起こした市内のスタジアムでは、ユニフォームに身を包んだ大学生たちが、サッカーの試合をしていた。停電が頻繁に起こるせいか、建物の中にはなんだか薄暗い。華やかな都市の生活の陰の部分を見たような気がした。



真っ暗な部屋で懐中電灯を頼りに夕食の準備をする家族。停電は日常茶飯事だ

丘陵地帯に延びる国道1号線。地元の人々は乗り合いバスか、徒歩で移動する





首都：キンシャサ
 面積：約234.5万km²(日本の約6倍)
 人口：約6,780万人(2011年)
 言語：フランス語、キコンゴ語、チルバ語、リンガラ語、スワヒリ語
 宗教：キリスト教、イスラム教、伝統宗教など
 1人当たり国民総所得(GNI)：190ドル(2011年)
 経路：日本からの直行便はなく、ブリュッセルやパリなどで乗り継ぐのが一般的。
 通貨：コンゴ・フラン(CDF) 1CDF=約0.1円(2013年2月現在)
 気候：一般的に10~5月が雨期、6~9月が乾期。首都の年間平均気温は約25度。



“キンシャサの奇跡”で知られるスタジアム。ボクサーたちのあこがれの地でもある



真っ暗になるまで畑仕事をしてきた子どもたち。採れたてのタマネギを誇らしげに見せてくれた



夜空に浮かぶマタディ橋。ライトアップされた姿は平和の灯にも見える

首都の繁栄を支えるのが、外国からの物資だ。アフリカで二番目の面積を有する大国だが、海に面する土地は少ない。コンゴ川の河口マタディ港が国の重要な補給路だ。日本の支援でマタディ橋が建設され、ヒトやモノの流れが活発に。街は大きく発展した。街灯の柔らかな光が街を照らしている。

国道1号線は、国の政策で比較的整備が行き届いている。それでも丘陵地はカーブが激しく、貨物コンテナを積んだ大型トレーラーなどが横転しているのを多く目にする。ヨーロッパによる植民地支配を受けていた時代、マタディ・キンシャサ間の地域は、奴隷貿易の中心地でもあった。そんな悲しい歴史を刻んだ道も、現在は、国を支える一本道として重要な役割を担っている。

長年の紛争を経て、いまだ、足りない尽くしの中、でたくましく生きる人々。国民の勤勉さと豊富な資源を糧に、この国が発展していく姿から目が離せない。

コンゴ民主共和国料理 トウガラシの辛さが効いた「ピリピリソース」



コンゴ民主共和国の主食は、キャッサバやコメ、ジャガイモ、食用バナナなど実に多様。中でも食卓によく登場するのがキャッサバ。粉にして練り上げた「フフ」、蒸して発酵させた「シュクワン」などが人気だ。おかずには、鶏や牛、豚、ヤギなどの肉、国の中央を流れるコンゴ川から捕れる川魚に、タマネギやニンジン、ナス、アボカドなどの野菜を添えて食べる。ワニやザリガ

ニ、イモムシなどが食べられる地域もあるという。これらの食材を、トマトスープで煮込んだり、ソテーにしたりするのが一般的だ。

一方で、塩コショウだけといったシンプルな味付けの料理も多い。そんな時に活躍するのが「ピリピリソース」だ。皿の隅に添え、食べる時にお好みで付ける。トウガラシをベースにしており「ピリッ」とした辛さが特徴。食材につけてもよし、そのまま食べてもよし。コンゴ料理には欠かせないアイテムだ。



さまざまな料理が並ぶビュッフェ式のレストランでは、ピリピリソースが重宝される

また、この国の食文化を代表するのがビール。ベルギーの植民地だったこともあり、首都にはビール工場が軒を連ねる。薄味で、すっきりした黒ビールが人気。若い女性の間では、黒ビールとココ・コーラを混ぜた“カブチーノ”が流行っているようだ。

【材料(100gの瓶1個分)】
 赤トウガラシ200g / タマネギ小1個 / ニンニク1~3片 / コンソメキューブ1個 / 塩・水少々

- 【作り方】**
1. 赤トウガラシ、みじん切りにしたタマネギ、ニンニクに、塩と水を加えてミキサーにかける。
 2. 油をひいた鍋で1を少し炒めたら、コンソメキューブを入れて、全体に火が通るまでさらに炒める。
 3. 2を焼き魚や肉、フライドポテトなどと一緒盛りつける。

取材協力：JICAコンゴ民主共和国事務所



マタディ橋を荷物満載で駆け抜ける。そのバランス感覚には驚く



道路脇に横転した貨物コンテナトレーラー



大型機械でコンテナの積み降ろしが行われるマタディ港

1 産業人材育成



職業訓練校への支援を再開

職業訓練の指導者養成のため、JICAが1980年代に支援を開始した国立職業訓練校（INPP）。日本人専門家による技術指導に加え、訓練に必要な溶接機やバーナーなどの機材を供与。紛争で一度は支援が中断したものの、INPPは自分たちの手で機材の維持管理をしながら訓練を継続してきた。JICAは2011年に支援を再開し、国内需要の高い自動車、冷凍・空調機器のメンテナンスを指導できる人材の育成に注力。今後は老朽化した訓練施設の改修、拡充にも着手する予定だ。



地球ギャラリー vol.54

JICAの活動

in コンゴ民主共和国

写真=久野真一(2下写真を除く)

長年にわたって紛争が続いたコンゴ民主共和国。2002年に和平合意が結ばれ、近年は平均5%の経済成長率を維持している。JICAはさらなる経済発展を後押しすべく、平和の定着と経済を支えるインフラ整備、人材育成を支援している。

JICAの支援

ここがポイント!

- 産業人材育成
- 平和の定着
- 交通インフラ整備

2 平和の定着



治安回復に向け警察官を育成

和平合意後も依然として治安が不安定な一部の地域では、平和の定着が喫緊の課題。しかし、警察官が市民から金品を奪うなど、警察内の規律が保たれていない。そこでJICAは、2004年から警察官を対象にした研修を実施。警察官としての心得を説く講義や、規律を身に付けるための訓練、盾を使った防衛技術の訓練などを数カ月かけて行っている。これまで研修に参加した警察官は、のべ1万8,000人。警察官の意識と能力が向上し、域内の治安回復に貢献している。



3 交通インフラ整備



経済成長を支える産業道路を改修

首都キンシャサ中心部、空港、国際港を結ぶ全長約12キロのポワルー通りは、貨物輸送の車両が頻繁に通る産業道路。国の物流の要となっているが、脇の砂利道から砂が入り込み、でこぼこで走行しにくいのが現状。車道と歩道の区別もなく事故のリスクも高い。そこでJICAは、現在の2車線の改修を進めると同時に、現地政府と協力して4車線に拡幅する工事を進めている。2014年に完了予定で、利便性と安全性が大幅に改善されることが期待されている。



新着情報 / イチオシ!

M OVIE

『第8回大阪アジア映画祭』

世界各国の映画監督が映し出す“アジアの世界”が味わえる。大阪アジア映画祭では、10日間にわたって全44作品を上映予定。タイの高校生が青年実業家になるまでの実話『トップ・シークレット 味付のりの億万長者』や、ミャンマーからタイへと越境した人々の苦悩を描く『貧しき人々』など、その舞台となる国・地域は15にのぼる。厳選作品によるコンペティション部門、最新の話題作を集めた特別招待部門などに分かれており、映画を通してアジアの多様な生活や文化を垣間見ることができる。



『トップ・シークレット 味付のりの億万長者』 ©GTH

会期：3月8日(金)～17日(日)
 会場：大阪市内(梅田ブルク7、梅田ガーデンシネマ、シネ・ヌーヴォ、第七藝術劇場、プラネット・スタジオ・プラス・ワン、大阪歴史博物館、ABCホール)
 URL：www.oaff.jp/2013/
 問：大阪アジア映画祭運営事務局
 TEL：06-6373-1232

E VENT

『第6回アフリカンフェスティバルよこはま2013』

6月に「第5回アフリカ開発会議(TICAD V)」開催を控える横浜。アフリカをもっと身近に感じてもらえるよう、アフリカ色のイベントがこの地で開催される。各国の料理を味わえるフードコート、アフリカのゲームなどが楽しめる体験コーナー、工芸品や衣料品、食品などを販売するマーケットなどの企画が盛りだくさん。ステージでは、アフリカ出身のミュージシャンによる音楽やダンス、民族衣装を紹介するファッションショーが開かれる。子どもから大人まで、誰もが楽しみながらアフリカを満喫できる3日間。

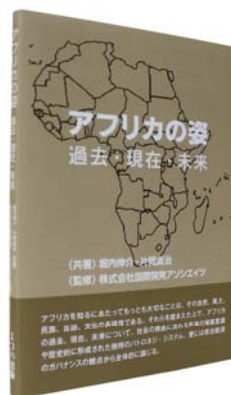
会期：4月5日(金)～7日(日) 11時～19時(最終日は17時まで)
 会場：横浜赤レンガ倉庫1号館
 URL：africanfestyokohama.com/
 問：アフリカンフェスティバルよこはま実行委員会

B OOK

『アフリカの姿 過去・現在・未来』

日本人にとっては地理的にも遠いアフリカ。その“姿”をもっと知ってほしい。この地域に長年かかわってきた研究者や元国連職員が、そんな思いで執筆したのが本書。“アフリカ”とひとくりにされがちだが、実は自然環境、文化、歴史、民族、言語などの多様性にあふれている。植民地時代以前から今日に至るまで、その歴史をたどりながら、政治システムや経済状況、貧困問題などを分析。アフリカの未来はどこに向かうのか。その答えを導き出してくれる一冊。

この本を
1人の方に
プレゼント
詳細は
38ページへ



堀内伸介・片岡貞治 共著
 国際開発アンソエイツ 監修
 エコハ出版
 2,100円(税込)

B OOK

『世界へ挑め!』

世界の市場で通用する企業をつくることで、経済低迷が続く日本を立て直したい。著者の徳重徹氏は2010年、ベンチャー企業テラモーターズ株式会社を設立。わずか2年で国内の電動バイクシェアNo.1を獲得し、今や、そのビジネスの舞台は東南アジアにまで拡大している。「成功確率が6割を超えたら行動に移す」「常に新しいこと、別のやり方を考える」「最初から自分は無理だと思わない」。一つ一つのチャンスを確実に成果に結び付けてきた著者が、日本人が世界で戦うために必要な考え方やスキルを伝授する。

この本を
1人の方に
プレゼント
詳細は
38ページへ



徳重徹 著
 フォレスト出版
 1,470円(税込)

読者の声

「12月号特集 科学技術協力」「世界を変えるイノベーション」を読んで

■ 将来JICAで働きたいと思っておりますが、高校生の私は、学校や地域のボランティアやチャリティーに参加できても、実際に現地に行くことはできません。なので、こうして現地の現状がそのまま分かるような雑誌はとても参考になります。この雑誌を読んで、大切なことは「井戸を作るのではなく作り方を教えること」だと学びました。これからは自分で、現地の人たちが必要なものを持続的に使うにはどうすれば良いのかを考え、積極的にボランティアに参加していきたいです。

(富山県 / 女性 / 15歳)

■ イノベーションとは先進国の言葉だけと思っていましたが、まったく違っていました。開発途上国が世界を引っ張ってくれる予感がする内容でした。

(大阪府 / 男性 / 47歳)

「1月号 特集 国際協力のいま」「日本の生きる道」を読んで
■ 毎回、とてもおもしろく読みやすいので、届くのが楽しみです。弟たちと「へえ」と言いながら読んでいます。読み終わった後に意見交換するのが私の楽しみです。

(神奈川県 / 女性 / 16歳)

■ 発展途上の国々の現状をどんどん掲載してください。日本がこれから何ができるのか、立ち位置を考えなければならぬと思います。

(福島県 / 女性 / 44歳)

■ 「日本の生きる道」を4つの柱として鮮明に示してあり、力強い。特に柱の一つに取り上げられている「市場の拡大」。その方針に従って、インドでは日本企業と官民一体で事業を展開する「デリー・ムンバイ間産業大動脈構想」が立ち上がっている。同構想が実現・成功すれば実績となる。この柱が日本経済を引っ張ってくれることを期待する。

(岡山県 / 男性 / 70歳)

本誌へのご意見・ご感想や
JICAへのご質問を
お寄せください。

プレゼント
付き

添付のアンケートはがき、Eメール、FAXから、本誌に対するご意見やご感想、またJICAへのご質問を、氏名・住所・電話番号・職業・年齢・性別・ご希望のプレゼントを明記の上、お送りください。ご記入いただいた個人情報統計処理およびプレゼント発送以外の目的で使用いたしません。当選者の発表は発送をもってかえさせていただきます。

◎応募締切：2013年4月15日

Eメール：jica@idj.co.jp
FAX：03-3221-5584(『JICA's World』編集部宛)

- ① エジプトのパッチワーク
- ② 書籍『アフリカの姿 過去・現在・未来』(p37参照)
- ③ 書籍『世界へ挑め!』(p37参照)



①



③

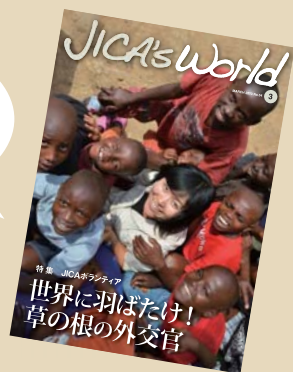
②

本誌をご希望の場合は
下記方法で
お申し込みください。

申込方法

本誌をご希望の方には、送料をご負担いただく形でご送付いたします。巻末の払込取扱票に、氏名・住所・電話番号・ご希望の送付期間・送付開始月を明記の上、指定の金額を郵便局でお支払ください。入金の確認後、発送手配をいたします(入金から1週間程度かかることもありますのでご了承ください)。複数冊、またはバックナンバーをご希望の方は送料が異なりますので、下記までお問い合わせください。

申込先 (株)国際開発ジャーナル社 総務部(発送代行)
住所 〒102-0083 東京都千代田区麹町3-2-4 麹町HFビル9F
TEL 03-3221-5583
FAX 03-3221-5584
Eメール order@idj.co.jp



次号予告 (2013年4月1日発行予定)

アフリカ

6月1~3日に横浜で開催される「第5回アフリカ開発会議(TICAD V)」。日本との関係性がますます深まるアフリカの“今”の姿、現地の人々と共に課題解決に挑む日本の取り組みを紹介します。

JICA's World

MARCH 2013 No.54

編集・発行 / 独立行政法人 国際協力機構 Japan International Cooperation Agency : JICA

〒102-8012 東京都千代田区二番町5-25 二番町センタービル

TEL : 03-5226-9781 FAX : 03-5226-6396 URL : <http://www.jica.go.jp/>

バックナンバーはJICAホームページ(<http://www.jica.go.jp/publication/j-world>)でご覧いただけます。

本誌掲載の記事、写真、イラストなどの無断転載を禁じます。



©Yuki Asada

パッチワークで生活にアラブの彩りを

ギザのピラミッド、スフィンクス、砂漠を歩くラクダ…。歴史の教科書でなじみ深いこれらの“モノ”。アフリカ大陸の入り口、エジプトの代表的なモチーフとして広まり、私たちをアラブの世界へと連れていってくれる。

首都カイロでは、さまざまな形でこれらの“モノ”に出会える。週末、街中で開かれているバザーに足を運ぶと、ラクダなどがあしらわれたパッチワークのバッグが一。青年海外協力隊員の指導を受けながら、聴覚に障害を持つ人々が制作している製品だという。

チクチクチク…。首都郊外の教会内にある小さな工房に入ると、女性たちがせわしく手先を動かしている。「もう少

し明るい色の布を使った方が女性受けするのでは?」。そう声を掛けるのは石井弘美隊員。障害者施設の職業訓練の一環として、エジプトの伝統工芸であるパッチワークの小物の商品開発、技術指導を担当している。

「耳に障害がある分、彼女たちの色彩感覚や手先の器用さには驚きます」と石井さん。お客さんに喜んでもらえる製品を作ろう!と、最近はみんなで子ども服の制作に挑戦しているところだ。

きめ細やかなデザインと鮮やかな色どりのパッチワークは、外国人観光客にも大人気。日本での生活に“アラブのテイスト”を加えたい人にはぴったりのアイテムだ。



石井さんが大切にしているのは“みんなで”取り組むこと。施設の人々との信頼関係も厚い

★クッションカバー、化粧ポーチ、バッグを各1人にプレゼント!→詳細は38ページへ





私の なんとか しなきゃ!

Vol. 29

PROFILE

1972年東京都出身。大学卒業後、TOKYO FMIに入社。8年間勤務した後、休職して青年海外協力隊に参加。ミクロネシア連邦で環境教育に携わる。帰国後は復職し、環境インタビュー番組「Hummingbird」などを担当。2010年3月に退社。現在、フリーアナウンサー兼環境アクティビストとして活動中。2011年4～5月には、東日本大震災の復興支援緊急ボランティアとして、宮城県岩沼市の流出物管理センターで活動。「なんとかしなきゃ!プロジェクト」著名人メンバー。

写真：ノーベル平和賞を受賞したケニアの環境保護活動家ワンガリ・マタイさんと



人生はつながっている

フリーアナウンサー **高柳 恭子**
TAKAYANAGI Kyoko

家族がマスコミ関係にいたこともあり、小さいころから報道に興味がありました。阪神淡路大震災のニュースを見てからは、私も現場で真実を伝えたいという思いが強まり、この世界に飛び込みました。

大きな転機となったのは、入社2年目。環境にかかわる活動をしている人を取材し、5分間の番組に編集するという仕事を任せられました。当時は、マスコミで環境が取り上げられることも少なく、私もまったくの素人。でも、熱意ある方々との出会いを通じて、人間の原点である環境を守ることが、どれだけ大切で意味のあることか気がきました。

そんなラジオの仕事はとても楽しかったのですが、一方で、もっと現場に出たいという気持ちが大きくなっていきました。人の顔を見ながら、環境について伝えたい。そこでたどり着いたのが青年海外協力隊。中学生の時、通学中に中吊り広告を見てからずっと気になっていたんです。退職して協力隊に挑戦しよう。その決意を上司に話すと、

「せっかくのチャンスなんだから辞めないでがんばってこい」と背中を押され、現職参加制度※での参加を決めました。

環境教育の隊員として派遣されたのは、太平洋に浮かぶミクロネシア連邦のコスラエ島。最初の数ヶ月は、現地語もうまく話せず、派遣先に「与えられた」仕事もありませんでした。会社を休職させてもらって来ているわけですから、途中で帰るわけにはいかない。何とか自分のできることを見付けなければと、島の人たちの生活スタイルを観察していました。そこで気になったのが“ごみ”。島にはごみ処理場もなく、たまったごみはすべて海の中にポイ捨て。それが海水の汚染につながり、どんどん魚が捕れなくなっていました。

それからは無我夢中でした。目標はごみ処理場を作ること。各家庭を回ってはごみを集め、どんな種類のものかどれくらい出ているかを調べるところから始めました。最初は周りの人たちにも「別に今は困っていないし、海に捨てても問題ないじゃない」と言われる始末。

でも、ごみまみれになって黙々と作業している私に興味を持ってくれたのでしょうか。次第に声を掛けてくれる人が増えてきて、任期が終了する直前には、やっごみ処理場を建設する予算を確保することができました。

帰国したら日本は環境ブームになっていて、ラジオで環境番組を担当させてもらうことになりました。アナウンサー、環境、国際協力。私が人生で追及したいと思っていた3つのキーワードが、一つの線としてつながったのです。

JICAボランティアの経験は、これまでの人生、そしてこれからの人生にきっとつながっていくはず。迷っている人がいたら、勇気を出して、その一歩を踏み出してほしいと思います。

「なんとかしなきゃ!プロジェクト」は、開発途上国の現状について知り、一人一人ができる国際協力を推進していく市民参加型プロジェクトです。ウェブサイトやFacebookの専用ページを通じて、さまざまな国際協力の情報を発信していきます。

「なんとかしなきゃ」で 検索

※休暇などの扱いで、所属先に身分を残したままJICAボランティアに参加できる制度。